

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

平成 27 年 3 月 2 日	
所属部局・職	霊長類研究所生態保全分野・修士課程学生
氏名	有賀菜津美

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ウガンダ, カリンズ森林保護区
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
チンパンジー母子の調査
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 11 月 7 日 ~ 平成 27 年 2 月 28 日 (4 ヶ月間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くて結構です。

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

2014年11月7日から2月28日の約3ヶ月間でおこなった、ウガンダでの調査について報告する。

前回の渡航でどのようなリズムで生活するのがよいのか、どのような距離感で現地のトラックと接すればよいのかが分かったため、今回の渡航ではスムーズに調査を開始することができた。そして、始まって2週間ほどでチンパンジーの顔と名前が一致し始めた。なかなか観察者の前に現れない個体もいるが、自分の調査しているMグループの個体は9割近く特徴を掴めたと感じた。そして、子どもチンパンジーの識別はとても難しいが、よく観察するとやや顔の黒い子や禿げている部分が特徴的な子などいて、段々と違いが分かるようになってきた。前回の渡航の際には、チンパンジーの母子について観察をするということだけ決めており、詳細は確定していなかった。しかし、帰国した際に色々な方とゼミなどを通して話し、チンパンジーの育児環境に焦点を当てたいと考えた。前回の渡航で初めて野生のチンパンジーを追い、オスとメスがあまりにも分かれて行動していることが、飼育下のチンパンジーを観察していた私にとってとても驚いた点であり、不思議に思った点だったからだ。母子を追跡するのはオスに比べ難しいが、今回の渡航では16組の親子を観察することができた。また、渡航期間中に新生児が3人生まれ、対象個体も十分に確保できると感じている。さらに、妊娠の可能性の高い個体もあり、次の渡航が楽しみである。

スケジュール

- 11月7～8日
出発（犬山－関西国際空港－ドバイ－エンテベ）
- 11月9日
カンパラにて買い出し
- 11月10日～2月26日
カリンズ森林保護区にてチンパンジーの調査開始
- 2月27～28日
帰国（カリンズ－カンパラ－エンテベ－ドバイ－関西国際空港－京都－犬山）



写真1 Kana:2人子どもを連れており、現在妊娠の可能性が大きい個体



写真2 Mizuki (2014年11月生) のグルーミングをする母 Minny

環境教育センターでは、前回同様サンデースクールを開催し、今回の渡航では全部で15回訪問することができた。前回は子どもたちがカリンズの霊長類についてよく知らないことに驚き、インタビュー方式の調査をおこなうだけで、終わってしまっていた。しかし、今回の渡航では、楽しみながら子どもたちに学んでもらうプログラムを組みたいと考え、子どもたちに2枚のパネルを見せながら問題をだし、自分が正解だと思う方のパネル側に移動するというゲーム形式のものを9回実施した。さらに、正解者として残った子どもにはモチベーション維持のため、環境教育センター内に作った表に名前を書き、シールを貼った(写真3)。そして、ゲームの前には必ず5~10分のレクチャーをおこない、時間のある時は一緒にチンパンジーやカリンズ森林についてのビデオを見た(写真4-5)。プログラムを始めた時は写真を見せ、名前や体毛の色や大きさの特徴を教えるだけだったが、後半になると子どもたちも意欲的になり、チンパンジーとヒトの表情の違いや、食べ物の違いなど少し踏み込んだ内容を扱うことができた。低学年の子であっても、熱心に毎週来る子は覚えがよく、高学年の子でもあまり来ない子は答えが分からないという状況になり、低学年の子が嬉しそうにしていたのを見てとても微笑ましかった。そして、想像以上に子どもたちが意欲的に取り組んでくれたため、チンパンジーだけではなくカリンズにいる昼行性霊長類6種について、多くのことを教えることができた。また、環境教育センターの前にクロシロコロブス(*Colobus guereza*)が来たことがあり、子どもが「Black and white colobus!」と言って教えてくれた時には、舞い上がってしまうほど嬉しかった。なぜなら、前回の渡航でおこなった調査で”colobus”という単語は一度も出てこなかったからだ。少しは子どもたちがカリンズ森林について、霊長類について興味を持つきっかけになってくれたら良いなと感じた。

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

A hand-drawn name table for a game. The table has a header row labeled 'NAME' and several columns. Each row contains a name and a series of colored dots (green, yellow, pink, orange) indicating correct answers. Some names have a star symbol next to them. The table is written on a piece of paper with a yellow border.

写真3 ゲーム正解者の名前表



写真4 ゲーム前におこなっているミニ授業の様子

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書



写真5 チンパンジーのビデオを一緒に見ている様子

前回は環境教育センターで子どもたち 50 人に霊長類に関する認知度調査をおこなったが、それと比較するために Tea Estate Primary School でも同様の調査を 2 月 9～16 日の平日 6 日間で 50 人に対して調査をおこなった。カリンズ森林保護区周辺に住む子どもたちではあるが、チンパンジーの写真を見せた際に英語で”Chimpanzee”と答えた子どもは 2 人しかおらず、環境教育センターの 24 人とは大きな差となった。やはり、研究者が出向き解説をする機会や本を読む機会のある環境教育センターの子どもの方が回答率は良かった。教育効果の検証など、結果をもとに今後分析していきたいと考えている。



写真6 Tea Estate Primary School の調査に協力してくれた子どもたち

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

2014年12月28日から2015年1月2日までは、スタディツアーとしてカリンズが年間最大4回受け入れている観光客の対応をした。私と同じように野生のチンパンジーに憧れて来た方と色々なことが知りたいという一環でアフリカの森に興味をもって来た方の2名だった。6日間カリンズに滞在し、チンパンジーをはじめとする昼行性霊長類6種の観察と村ツアーをおこなった。森での観察は、研究者がいつもどんなことを考えてどんなノートを取りながらおこなっているのか、その場その場で伝えることができ、私にとっても新鮮でよい機会であった。そして、村ツアーではマトケ収穫、家庭料理作り（マトケ、カロ、スープ）、カゴ編み体験などをし、その後村の中を散策して村人と交流をおこなった。森で野生動物を楽しんでもらうだけでなく、現在その森がどのような状況におかれていて、どんな人々が周辺に暮らしているのかを知ってもう機会があるのは良いと思った。しかし、受け入れてくれた家庭は観光客がくることによって、自分たちにも利益があるから受け入れてくれたのか、今までの付き合いがあったから受け入れてくれたのかは、分からなかった。エコツーリズムとして、観光客の受け入れを進めていくにはその関係性を村人自身が理解する必要があると思うが、なかなか容易ではないと感じた。今後も何度か観光客の受け入れを体験することになると思うので、引き続き自分の中でも疑問を持ちながら、対応したいと思った。



写真5 村ツアー：カゴ編み体験をする様子

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書



写真6 村ツアー：村の周りに広がる茶葉のプランテーションを説明する様子

6. その他（特記事項など）

今回の出張を行うにあたり、熱心な指導を受け賜りました、湯本貴和様、橋本千絵様、田中正之様に深く感謝いたします。さらに、ご支援ならびにご協力いただきました松沢哲郎様、調査地スタッフとトラックの皆様に深く御礼申し上げます。本活動は、PWS より助成を得て、おこないました。ありがとうございました。